

# 多摩ニュータウンにおける地名の命名原理

## Naming principles of place names in Tama New Town

北西 諒介

Ryosuke KITANISHI

本稿では、開発地域における地名の命名の特徴と、地域一帯へのまとまった命名行為の持つ意味の考察を目的に、多摩ニュータウンにおける地名の命名原理と命名プロセスの検討を行った。その結果、他地域と共通する命名原理の諸類型が確認され、開発地域あるいは近現代の地名の命名の一般的な傾向として位置づけられた。他方で、開発主体や時期による傾向の差が大きく、ニュータウン全体としてのまとまった方向性は確認されなかった。

キーワード：地名、愛称、ニュータウン、命名原理

Key words : place name, nickname, new town, naming principles

### I はじめに

#### 1 問題の所在

地名は、その語源に命名者集団の空間認識が反映されていることから、さまざまな研究分野における分析ツールとして活用されてきた。例えば、村落共同体の伝統的な空間認識や過去の景観を明らかにする目的から、主に前近代の地名を中心にその成り立ちが考察されてきた。その一方で、近現代の地名の命名がどのように行われてきたか、その命名のあり方についての分析はこれまであまり行われてこなかった。

北西（2018）ではそうした問題意識から、近現代の開発地域における地名の命名について、ニュータウン（以下、NT とする）を取り上げ、千里 NT を事例に、町名をはじめ、道路や橋、公園の名前の命名について考察した。特に、NT の開発と前後して行われた命名のほとんどは、開発主体である大阪府によるもので、その一貫した命名原理の存在が注目される。大阪府による初期 NT の地名の命名には、以下のような特徴が指摘された。第一に、部分的に小字などの従前の地名が踏襲されつつも、基本的に全く新しい名前が積極的に創出されたこと、第二に、新しい地名には数字や相対的な位置関係、樹木の名称などが採用されており、それらは NT 内で完結した秩序に基づいていたこと、第三に、数字や樹木名による命名は、地名の由来として参照可能な事物に乏しかったためと考えられることである。北西（2018）では、これらの特徴の一部が 1990 年代に命名された道路愛称にも共通して見出されることから、開発地域あるいは現代

の都市空間における地名の命名の一般的傾向として位置づけられるとの可能性を指摘した。本稿の目的の第一は、千里 NT の事例で得られたこれらの知見が、他地域でも同様に看取されるか、前稿の内容の相対化を図ることである。

地名の命名の一般的傾向という視点に加えて、本稿では、ある一定の範囲に存在する複数の地名が、同一の主体によって同時に命名されることの意義についても注目したい。例えば、千里 NT の開発段階で主に大阪府によって名付けられた地名群は、宅地造成により誕生した建造環境が、居住者の生活空間へと転換されていく過程で、二つの役割を担っていたと考えられる（北西 2018）。すなわち、NT という先進的で新しい地域を表象するのにふさわしい、現代的な地名を付与するという象徴的役割と、生み出されたばかりの均質的な空間を差異化し、識別可能なものにするという実用的役割である。こうした役割は、一つ一つの地名からも読み取れるものではあるが、むしろそれらの集合として把握することによってより明確になるといえる。

同様の例は、Azaryahu (1994) による東ドイツの「記念碑的地名」の事例にも指摘されよう。「Kaiserstrasse」という通り名は、確かにそれ単体でもドイツの帝政時代を象徴していると言えるが、特定の思想や歴史解釈などを景観の中に刻み込んだり排除したりしようとする政治的な意図は、同じような時期に名付けられ、または抹消された一連の記念的命名行為を見ることでより確かなものとなる。このように、地名を個としてではなく群として捉えることを通して、ある地域一帯に地名を付与する命名行為がどのような意味を有していたのかを明らかにできる。本稿の目的の第二は、そうした意味づけが別の地域ではどのように見出されるかを考察することである。

地名をそれ単体としてではなく群として捉える研究視角は、これまでも例がなかったわけではない。例えば、山口恵一郎は同種の地名の分布上の集合を「地名群落」と称した（山口 1977）。この地名群落は、地名の言語的な「型」の分布・伝播を知るための指標として用いられた概念であるが、敷衍すれば何らかの共通性によって地名をグループ化した集合名詞として捉えられよう。また、これとは異なった文脈で、海外の地名研究では *namespace* や *toponymic landscape* といった、「地名景観」と訳されるような概念を用いた研究事例も存在する。Zelinsky (1993) はグレーター・ワシントン圏の *namespace* を解析し、「地名の名づけの時間的な重なり」

(Zelinsky 1993: 93) の各レイヤーを、国家的・地域的・民族的な特徴や時間の経過とともに移り変わる集合的な潜在意識の変化（＝地名の流行 *toponymic fashion*）の中に位置づけて解釈している。Zelinsky による *namespace* の解析は、インディアンに由来する自然地名に始まり、植民地時代の水路や農場、南北戦争期の砦、近代の都市計画によって成立した通りの名称、現代の郊外分譲住宅地の名前に至るまで、様々な時代とスケールを横断する形で行われる。つまり、この集合を形作る共通性は、同じ地域に存在している、もしくは存在していたということであり、命名主体の違いや要素同士の関係性は集合の定義に考慮されていない。同様に、Liudmila et al. (2018) がロシアの中央ヤクーチア地域の *toponymic landscape* を、開拓の歴史とその過程に

おける民族の景観認識を明らかにする目的で取り上げているが、こちらも通史的な視点から地名全体を捉えた概念として用いられている。

このように、地名群落や地名景観と言う場合、命名時期や命名主体の異なる個々の地名が持つ様々なバックグラウンドを区別することなく、事後的に見出される集合概念としての意味合いが強い。ゆえに、千里 NT や社会主義体制下の東ベルリンの通り名で見出されたような、全体を統べる何らかの方向づけを有する地名群を指して総称するには、やや意味が広すぎるように思われる。そこで本稿では、個々の要素間の分担関係や全体としての統一性を強調する意図から、そうした地名群をある一定の秩序によって成り立つ体系として捉え、「地名体系」と称する。この地名体系は、上述の地名景観の部分集合を成すものと位置づけられ、個と全体とが相互に意識して名付けられたと考えられる地名どうしの集合である。命名原理や命名プロセスにおける共通性や規則性を基に地名体系を見出すことで、一連の命名行為によってその地域がどのくらいのスケールの中で、どのように意味づけられようとしたのかを明らかにすることができると考える。

以上の二つの研究目的から、本稿では東京都の多摩 NT を事例に、その開発から現在に至るまでの命名原理と命名プロセスを分析し、その地域的傾向と命名行為に付与された意味を明らかにする。千里 NT の事例との比較・考察を通して、多摩 NT における地名の命名の地域的特色と一般的傾向を見出す。なお、本稿における命名原理とは、その地名が何に基づき、どういった言葉として表現されているのかという仕組みであり、命名プロセスは誰がどのような方法で地名を決めたのかを指す。命名原理の分析は、地名の由来となった物事とその表現形態を示すことで、どういった地域の見方が形成されようとしたのかを明らかにする端緒となり、命名プロセスの分析は、地名を決めるにあたり誰のどういった意向が強く反映されたのかを明らかにするものとして位置づけられる。今回、分析の対象とする地名は、行政区画(町名)、道路、橋梁、公園の名称である。

## 2 命名原理の類型化と地名体系

本節では、北西(2018)の内容を基に、本稿の分析で使用する概念のうち、命名原理と地名体系について整理する。まずは千里 NT の事例を基に、命名原理の実例の提示とその類型化を行う。そして、本稿が捉えようとする地名体系の具体例を、同じく千里の事例に基づいて示す。

千里 NT では、その開発から現在に至るまで、幾度かのまとまった地名の命名行為が確認された。拙稿では、これらを三つに区分して把握した。すなわち、1969年以前の計画・開発期、1970年の NT 完成期、1990年代から2000年代初頭にかけての道路愛称期である。前2者は全体の開発を担った大阪府企業局が中心となって命名を実施したもので、道路愛称は NT を管轄する吹田・豊中の各市がそれぞれに実施した事業によるものである。各時期の命名とその原理をまとめたものが表1である。

多摩ニュータウンにおける地名の命名原理（北西諒介）

表1 千里ニュータウンにおける地名の命名と命名原理の類型

所在地	対象	計画・開発期 (~1969年)	完成期 (1970年)	道路愛称期 (1993~2001年)
吹田市	津雲台 住区	南千里津雲町 広域名+小字変形	津雲台 小字変形	-
	津雲台 地区公園	千里南公園 地区名+方角	→	-
	津雲台 近隣公園	あやめ谷公園 樹木	津雲公園 地区名	-
	津雲台 児童公園		さるすべり公園 樹木	-
	津雲台 児童公園		やまぶき公園 樹木	-
	高野台 住区	南千里高野町 広域名+参照	高野台 参照	-
	高野台 近隣公園	大和谷公園 小字	高野公園 地区名	-
	高野台 児童公園		さざんか公園 樹木	-
	佐竹台 住区	南千里佐竹町 広域名+地区名・参照	佐竹台 地区名・参照・造語	-
	佐竹台 近隣公園	菩提池公園 参照	佐竹公園 地区名	-
	佐竹台 児童公園	佐井寺公園 地区名	ねむのき公園 樹木	-
	佐竹台 児童公園		ゆりのき公園 樹木	-
	佐竹台 児童公園		-	-
	桃山台 住区	南千里王字町 広域名+小字	桃山台 参照・造語	-
	桃山台 近隣公園	春日公園 地区名	桃山公園 地区名	-
	桃山台 児童公園		もものき公園 樹木	-
	桃山台 児童公園		にれのき公園 樹木	-
	竹見台 住区	南千里石川町 広域名+小字	竹見台 参照	-
	竹見台 近隣公園	イラス公園 小字	竹見公園 地区名	-
	竹見台 児童公園		しいのき公園 樹木	-
	竹見台 児童公園		あべりあ公園 樹木	-
	青山台 住区	北千里蓮間町 広域名+小字	青山台 参照・造語	-
	青山台 近隣公園	寅谷公園 小字	青山公園 地区名	-
	青山台 児童公園		こでまり公園 樹木	-
	青山台 児童公園		くちなし公園 樹木	-
	藤白台 住区	北千里藤白町 広域名+小字	藤白台 小字・造語	-
	藤白台 地区公園	千里北公園 広域名+方角	→	-
	藤白台 近隣公園	藤白公園 小字	→	-
	藤白台 児童公園		ふじのき公園 樹木・小字変形	-
	藤白台 児童公園		-	-
古江台 住区	南千里古江町 広域名+小字	古江台 小字	-	
古江台 近隣公園	申谷公園 小字	古江公園 地区名	-	
古江台 児童公園		はぎのき公園 樹木	-	
古江台 児童公園		おばな公園 樹木	-	
豊中市	新千里北町 住区	西千里柿木町 広域名+小字	新千里北町 広域名+方角	-
	新千里北町 近隣公園	榎ノ木谷公園 小字	北町公園 地区名	-
	新千里北町 児童公園	榎ノ木池公園 参照・小字	榎ノ木公園 樹木・参照	-
	新千里北町 児童公園		ひらど公園 樹木	-
	新千里北町 児童公園		つつじ公園 樹木	-

豊中市	新千里東町	住区	西千里長谷町	広域名+小字	新千里東町	広域名+方角	-
	新千里東町	地区公園	千里中央公園	広域名+方角	→		-
	新千里東町	近隣公園	深谷公園	小字	東町公園	地区名	-
	新千里東町	児童公園			もくせい公園	樹木	-
	新千里東町	児童公園	-		あかしや公園	樹木	-
	新千里西町	住区	西千里高塚町		新千里西町	広域名+方角	-
	新千里西町	近隣公園	中谷公園	小字	西町公園	地区名	-
	新千里西町	児童公園			からたち公園	樹木	-
	新千里西町	児童公園			ばらのき公園	樹木	-
	新千里南町	住区	西千里藤原町	広域名+小字	新千里南町	広域名+方角	-
	新千里南町	近隣公園	切木ヶ丘公園	小字変形	南町公園	地区名	-
	新千里南町	児童公園	切木谷公園	小字	-		-
	新千里南町	児童公園			きりのき公園	樹木・小字変形	-
	新千里南町	児童公園			つばき公園	樹木	-
		国道	御堂筋線	その他	御堂筋	その他	
		府道	千里中央線	広域名+位置	千里中央筋	広域名+位置	千里さくら通り 広域名+樹木
		市道	千里1号線	広域名+数字	千里南通	広域名+位置	千里ぎんなん通り(吹田市部分) 広域名+樹木
		市道	千里2号線	広域名+数字	千里東筋	広域名+位置	千里けやき通り 広域名+樹木
		市道	千里3号線	広域名+数字	千里北通	広域名+位置	三色彩道(吹田市部分) 参照・造語
	市道	千里4号線	広域名+数字	千里山手通	広域名+位置	千里さくら通り(吹田市部分) 広域名+樹木	
	市道					千里アートロード[H7] 広域名+参照	
	市道					合歓の木道 樹木	
	市道					古江路 地区名	
	市道					なかよし道 抽象・参照	
	市道					九十九坂 小字変形	
	市道					風の子通り 抽象・参照	
	市道					竹の子通り 抽象・地区名	
	市道					千里小道・こぼれび通り [H5] 広域名+参照・抽象	

注) 空欄は資料の中に存在が確認されるものの、名称が付与されていないものを示し、「→」は従前と同じ名称であることを示す。

資料:大阪府(1970),大阪府公文書館蔵『千里マスタープラン経過(図面集)』、『千里』第60号(昭和44年11月1日発行),みんなで選んだ吹田のみち(2001)を基に作成

## 多摩ニュータウンにおける地名の命名原理（北西諒介）

この表に示したように、千里 NT における地名の命名原理は、いくつかの類型に分類することができる。第一に、完成期の近隣公園名に見られるような、その地物が立地する町名を名付ける地区名型、第二に、完成期の道路名や地区公園名に見られる、「千里」のような地区よりも広い範囲の地域名を冠する広域名型、また、この地区名、広域名の下に続く語として、数字によってそれらを区別した+数字型と、域内における位置や方角を付した+方角・位置型である。第三に、完成期の児童公園名や橋梁名に見られるような樹木型、第四に、道路愛称の一部に見られる、「なかよし」のような抽象名詞を用いた抽象型、第五に、計画・開発期の公園名などに見られるような小字型である。上記3類型は、語頭に広域名や地区名が付いた場合、「+」を用いて複合的な類型として扱う。例えば、「千里ぎんなん通り」は広域名+樹木名型である。そして第六に、「桃山台」のような付近の地理的特徴を基に造語されたものを参照型とする。また、一つの地名に複数の類型が見出される場合、「・」を用いて二つの類型を併記する。例えば、小字「切木谷」を基にしつつ、他の公園の樹木型と合わせるように名付けられたと考えられる「きりのき公園」は小字・樹木型となる。また、小字名「九十九」を基に名付けられた町名「津雲台」のように、もともとの形にややアレンジを加えたものを、小字変形型のように称する。

そして、こうした類型化の上で見出されるのが、本稿が捉えようとする地名体系である。その最もわかりやすい例は、同一主体による命名で、なおかつ各要素間の共通性と規則性が捉えやすい完成期の大阪府による道路・公園・橋梁の地名群であろう。例えば、公園名はその公園の規模に応じて、広域名+位置・方角型、地区名型、樹木型と階層的に秩序づけられた命名原理を持つ。また、その数と分布の広がりから言って、どちらも千里 NT 内の最もマイクロな単位での空間識別を担っていると考えられる児童公園と橋梁の名称については、互いに近接するもの同士での対応関係も結んでいる。このように、命名原理・プロセスなどの面で共通点を持ち、一定の秩序が見出される地名群を地名体系とする。なお、この地名体系は共通性や規則性をどこまで幅広く設定するかによって、様々な集合を成せるものとする。

以下では、多摩 NT の地名の命名原理と命名プロセスの分析によって、このような地名体系がどの程度見出されるのか、検討していくことになる。次のII章では、多摩 NT の開発について、その概要をまとめる中で千里 NT との相違点を明確にし、後半の比較検討のための前提とする。続く3章では、多摩 NT 内の各種地名について、その命名原理と命名プロセスを明らかにし、その傾向を指摘する。IV章では、III章の内容を踏まえつつ、多摩 NT の地名体系がどのように見出されるのかを検討し、千里の事例との比較を行う。これらの作業を通して、開発地域あるいは現代という時代下における地名の命名行為の特徴について、その知見の蓄積に寄与したいと考える。

## II 多摩 NT の開発と千里 NT との相違点

千里 NT と多摩 NT はともに日本有数の大規模開発 NT として知られているものの、詳しい

開発の過程などを見ればいくつかの点で相違が見られる。本章では地名の命名の比較検討という目的に照らして、いくつか重要と思われる点について指摘しておきたい。

まず、開発の規模と期間について、千里NTは日本初の大規模開発NTとして計画が始まり、事業期間は1960年から1969年のおよそ10年間で1,160haを開発した(大阪府1970)。一方、後発の多摩NTは1966年から2008年にかけて2,884haを開発した長期かつ大規模な事業となっている(佐藤健正・市浦ハウジング&プランニング編2016)。千里と比べ事業期間が長いことは、時期差によって生じる命名の傾向の差異を捉えられる可能性を示唆する。また、多摩NTの開発は四つの市町村に跨って行われており、その数は2市に跨る千里よりも多い。

次に、事業主体(開発主体)に着目すると、千里は一貫して大阪府企業局が開発を担った一方、多摩は住宅公団(現・都市再生機構。以下、公団とする)、東京都住宅供給公社(以下、公社とする)、東京都など、主体が様々な存在する(波多野・佐藤1983)。また、大部分は新住宅市街地開発法(以下、新住法とする)に基づく事業区域となっているが、一部では土地区画整理事業による開発区域も混在する(図1)。その境界は既存の集落の立地や地形に即して定められており、主に谷筋に沿って新住事業区域に入り込む形で広がる。開発の主体が複数存在することは、命名の主体が複数存在する可能性を示唆する。また、これら複数の主体によって分割された事業区域は、場所によってはかなり入り組んで設定されていることから、地名体系の面的な広がりによって一定の制約を与えている可能性もある。

既述したように、多摩NTは4市に跨っているが、今回の地名分析にあたっては、その大部分を占める多摩・稲城・八王子の三つの市域を中心に考察を行うこととする。資料としては、東京都南多摩新都市開発本部による『多摩ニュータウン開発の歩み』(1987)やNT開発の大部分を担った公団による『多摩ニュータウン工事記録』(住宅・都市整備公団南多摩開発局1990)及び『同1991~1999』(都市基盤整備公団東京支社多摩NT事業本部1999)、『多摩ニュータ

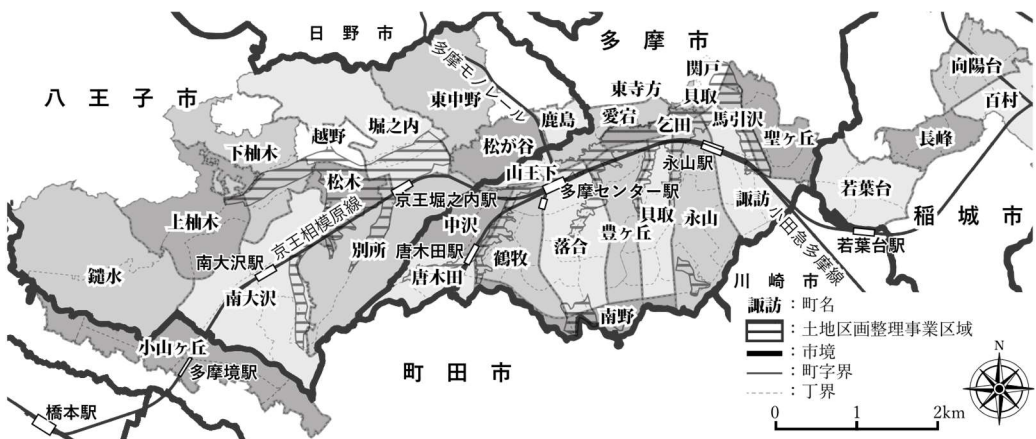


図1 対象地域の概要

注) 基盤地図情報を基に作成。

## 多摩ニュータウンにおける地名の命名原理（北西諒介）

ウン事業誌 通史編』（独立行政法人都市再生機構東日本支社多摩事業本部 2006）などを開発側の資料として利用する。公団によってまとめられた資料が多くを占めるため、命名原理や命名プロセスの解明に一定の制約や偏りが生じる可能性は否めないが、多摩 NT の区域の大半の地名を地図上に示し、網羅的に扱った資料としての価値があり、主要な資料として活用したい。一方、市が自治体として認識している地名体系が表わされ、なおかつ近年の現況を示す資料として、各市が公開する公園一覧や橋梁一覧などを用いる。分析にあたって主に用いた資料は表 2 にまとめた通りである。また、これらに加え、各市の広報誌や地域新聞『多摩ニュータウンタイムズ』の記事なども適宜利用する。

### Ⅲ 多摩 NT における地名の命名

#### 1 町名

多摩 NT 内の行政区画は、いずれの市域においても開発後の新しい街区形態に合わせた再編がなされている。ただし、開発計画における近隣住区と町域は必ずしも一致しておらず、複数住区が一つの町名になっているなど、一対一の対応関係にはない場合も散見される。町域再編の方式として、八王子市域では住居表示が実施された一方、多摩市と稲城市、町田市では住居表示は行われず、町名地番整理が実施されている。方式は異なるものの、いずれの場合においても NT 開発以前の大字・小字による行政地名の体系は一新されたことになる。

しかし、表 3 からわかるように、町名の大多数は基本的に旧来からの大字もしくは小字を踏襲しており、そうでない場合でも「愛宕」や「松が谷」など、その地域の寺社や過去の小字名などに基づくものとなっている。千里 NT で見られたような造語を伴う命名原理はあまり確認できず、多摩市の「聖ヶ丘」と稲城市の「向陽台」と「若葉台」の計 3 町名のみが当てはまる。

多摩 NT 第 4 住区の町名である「聖ヶ丘」をめぐるのは、多摩市と町名地番整理協議会が当初「連光台」という新町名を提示していたが、地元住民らからの反対意見が相次いだという新聞記事がある（多摩 NT タイムズ 1978 年 4 月 15 日）。記事によれば、聖ヶ丘地区は元々、大字連光寺の一部であり、開発に伴い広すぎる大字から分離させる形で新しい町名が考え出され

表2 本論文で使用する主な資料とその年代

資料名	発行年	発行者	本文での略称	資料の性格
『多摩ニュータウン開発のあゆみ 第1編』	1987	南多摩新都市開発本部	『あゆみ①』	開発側
『多摩ニュータウン開発のあゆみ 第2編』	1987	南多摩新都市開発本部	『あゆみ②』	
『多摩ニュータウン工事記録』	1990	住宅・都市整備公団南多摩開発局	『工事記録①』	
『多摩ニュータウン工事記録 1991～1999』	1999	都市基盤整備公団東京支社 多摩NT事業本部	『工事記録②』	
『多摩ニュータウン事業誌 通史編』	2006	独立行政法人都市再生機構 東日本支社多摩事業本部	『事業誌』	
多摩市道路・橋りょう名マップ	1993	多摩市都市づくり部道路課	-	現況
多摩市橋梁位置図	2018	多摩市都市整備部道路交通課	-	
稲城市橋梁及びトンネル位置図	2012	稲城市都市建設部都市計画課	稲城市橋梁位置図	



表3 多摩ニュータウンの町名とその由来

市名	町名	成立	由来等
多摩市	聖ヶ丘	1980	聖蹟記念館の「聖」の字を取って。 乞田川を挟んだ対岸に「桜ヶ丘」があることなどにもよる（多摩市の町名）。
	連光寺		大字。
	関戸		大字。
	馬引沢	1990	連光寺の小字。
	諏訪	1970	連光寺の小字「諏訪越」、「諏訪坂」に由来（多摩市の町名）。
	永山	1970	乞田の小字。
	乞田		大字。
	貝取		大字。
	豊ヶ丘	1975	落合の小字「豊ヶ岡」に由来。
	落合	1976	大字落合。
	鶴牧	1980	落合の小字。
	唐木田	1991	落合の小字。
	愛宕	1971	愛宕神社、和田村南方の「愛宕山」に由来（多摩市の町名）。
	東寺方		大字。
和田		大字。	
山王下	1976	落合の小字。	
中沢	1993	落合の小字。	
南野	1975	多摩市の「南」と小野路町の「野」から（多摩市の町名）。	
八王子市	東中野		由木村の大字「中野」に由来。 由木村編入の際、八王子市中央部に中野があったため、東の字を冠する（角川）。
	堀之内		由木村の大字。
	別所		由木村の大字。
	松木		由木村の大字。
	越野		由木村の大字。
	南大沢		由木村の大字。
	下柚木		由木村の大字。
	上柚木		由木村の大字。
	鎌水		由木村の大字。
	鹿島		鹿島神社にちなむ（角川）。
	松が谷		東中野の旧小字名「松が谷戸」にちなむ（角川）。
稲城市	向陽台		
	長峰		小字。
	若葉台		京王線の駅名が先立つ。
	百村		大字。
町田市	小山ヶ丘		

注) ( ) 内は典拠。角川：「角川日本地名大辞典」編纂委員会編（1978）、多摩市の町名：東京都多摩市都市建設部都市計画課編（1992）を指す。

たという。記事は、新住事業の区域に入っているものの、実施が未確定になっている地区（いわゆる「白地区」）の住民から、少なくとも実施の見通しが立たないうちは現行の「連光寺」の維持を望む意見が出されたということを伝えている<sup>1)</sup>。さらに、土地区画整理事業の対象区域であった馬引沢の自治会長は、「この地区は三百年も続いている土地で、地名への愛着は強い。白ヌキ地域も一緒に含むなら、その地区の人達の考えも尊重しなければならない、と考えていたが、そこを外すとなれば連光台では納得出来ない」としたという。

現況から推測するに、記事中の白地区は最終的には「連光台」を改め「聖ヶ丘」として、新町域の中に取り込まれたものと考えられる。一方、「馬引沢」は現在の聖ヶ丘からは独立した町域

を形成しており、引用した自治会長の意見が採り入れられたものと考えられる。「馬引沢」の例はこの地域における既存集落の存在感と、従前の地名の根強さを物語る例であると言えよう。多摩市内において、大字・小字に由来する町名が多いのも、既存集落部を中心とする土地区画整理事業区域が新住区域と合わさって一つの町に編成されたことによる影響が大きいとみられる。

「向陽台」は稲城市内で最初に入居開始した NT 開発地区の町名である。稲城市の広報紙によると、市議会議員や学識経験者、地区代表者らによって構成される町名地番整理審議会による当初案としては、「向陽台」の他に「朝日ヶ丘」、「百和台」、「緑ヶ丘」の計 4 案が示されており、地元住民に意見を募ったのちに「向陽台」に決定されたものであるという（「広報稲城」1987 年 6 月 20 日 429 号）。他の稲城市内の 2 地区に関しては、別案を確認することができなかったが、恐らく同様のプロセスによって決定されたものと推測される。「長峰」は小字名に由来し、同市内の「向陽台」および「若葉台」とは異なる命名原理によって名付けられている。また、「若葉台」は 1998 年に新設された町名であるが、1974 年開業の京王電鉄の駅名が先行しており、それを追認したものとなっている<sup>2)</sup>。

以上で個別にその経緯を見たもの以外は、そのほとんどが従前の地名を引き継ぐか、もしくはそれに因んで名付けられたものである。開発地域によく見られる「台」や「ヶ丘」の付く町名が多摩 NT の中では少数派である点が特徴的である。こうした町名の命名傾向に関しては、先述したように、新町域が土地区画整理事業区域を併せ持つため、既存集落の存在が従前の地名を継承させる方向に強く表れたと考えられる。実際、小字名に由来する「永山」や「鶴牧」などは、町域の北端に含まれる土地区画整理事業区域の同名の旧集落との関係が大きいと思われる。

他方で、新町名の設定に際しては、ある程度の地名の選別も行われたのではないかと考えられる。例えば、「豊ヶ丘」は旧大字落合の小字「豊ヶ岡」に因むとされているが、現在の豊ヶ丘の町域の大部分は旧大字乞田および貝取の一部から成り立っており、旧大字落合の小字も「鶴ヶ峰」の一部を含むのみである（東京都多摩市都市建設部都市計画課編 1992）。つまり、「豊ヶ丘」は、元の小字にある「岡」を「丘」の字に変じさせることで、開発地域らしい地名となることから、字の区域を越えて採用されたものと解釈できる。なお、このような小字名に因みつつも、命名者の意図に合わせた変化を加えて新たな地名とする例は、小字変形型の命名原理を採用した千里の公園名に見られた。

## 2 道路名

『事業誌』などの開発側の資料では、多摩 NT の道路には幹線を中心に固有の路線名が付与されていたことが確認される。主に現在の都道にあたる NT の外へと繋がる幹線については「府中町田線」のような起終点の地域名に基づく呼称がなされ、他地域でも一般的に見られるような形式である。他方、NT 内で完結する地区幹線などについては「ニュータウン街路 1 号線」や「多摩センター南北線」のような地区名＋数字型・方角型の呼称がなされている<sup>3)</sup>。「ニュータ

ウン街路」は、主に住区の境界となっている南北方向の谷筋に引かれており、多摩市の東から1号線の順で八王子市に至る順序で付番される。また、公団による『工事記録①』には路線名・都市計画道路番号と並んで通称名も記されており、「貝取/豊ヶ丘間」など、住区境界となっていることが由来と思わせる名称がつけられている。いずれもその命名プロセスまでは明らかとなっていないが、通称名などは開発（施工）主体による命名として捉えられるだろう（表4）。

こうした開発主体の側で共有されていたであろう道路名がある一方、多摩市と稲城市では道路愛称事業がそれぞれ別に行われている（図2）。多摩市では、1981年度に12路線、1982年度に17路線、1990年度に42路線の愛称が新たに名付けられている。このうち、区画整理事業区域を含めた多摩NT区域を通過するものは半数以上の51路線である。いずれも市民からの公募を基に道路愛称設置委員会による審査を経て名付けられるというプロセスを辿る。

多摩市では、一連の事業により、上述の「ニュータウン街路」をはじめ、多摩市管理の市道で幅員が一定以上あることなどを条件に、歩道を含めた主要な路線に愛称が付与された。その命名原理に着目してみると、基本パターンとしては「永山いちよう通り」のような地区名を冠し、その下に樹木（さくら、けやきなど）、地形（尾根、谷など）、周辺施設（公園、学園など）、位置（中央、北など）のいずれかがくるものとなっている。こうした命名原理は、千里でも確認された類型であり、NT外の多摩市域でも共通して見られるものでもある。そのほか、町の境界線を成す幹線道路には「大通り」、勾配のある道路には「坂」が付けられるなど、語尾のバリエーションと一定の規則性も確認される。

稲城市では、市内でのNT開発が進められている最中の1991年に、当時すでに入居を開始していた向陽台地区で先駆けて三つの道路愛称が命名されている。これらの愛称は、市民からの公募と稲城市道路・公園等名称選定委員会による選定のプロセスで、市内27路線の愛称を付与する事業の一環として名付けられたものである。その後、同地区の他の道路や長峰地区、若葉台地区においても道路愛称も定められ、徐々に愛称道路の本数が増えてきたということが確認されるものの、1991年の命名以降の公募の記事などを発見することはできなかった。稲城市職員への聞き取りによれば、道路愛称は地元住民らとの調整によって決められる場合もあるといい、これらに関しては公募が行われなかった可能性もある。なお、八王子市においては、道路愛称事業が行われているものの、NT区域内の道路に愛称が付与された例はない。

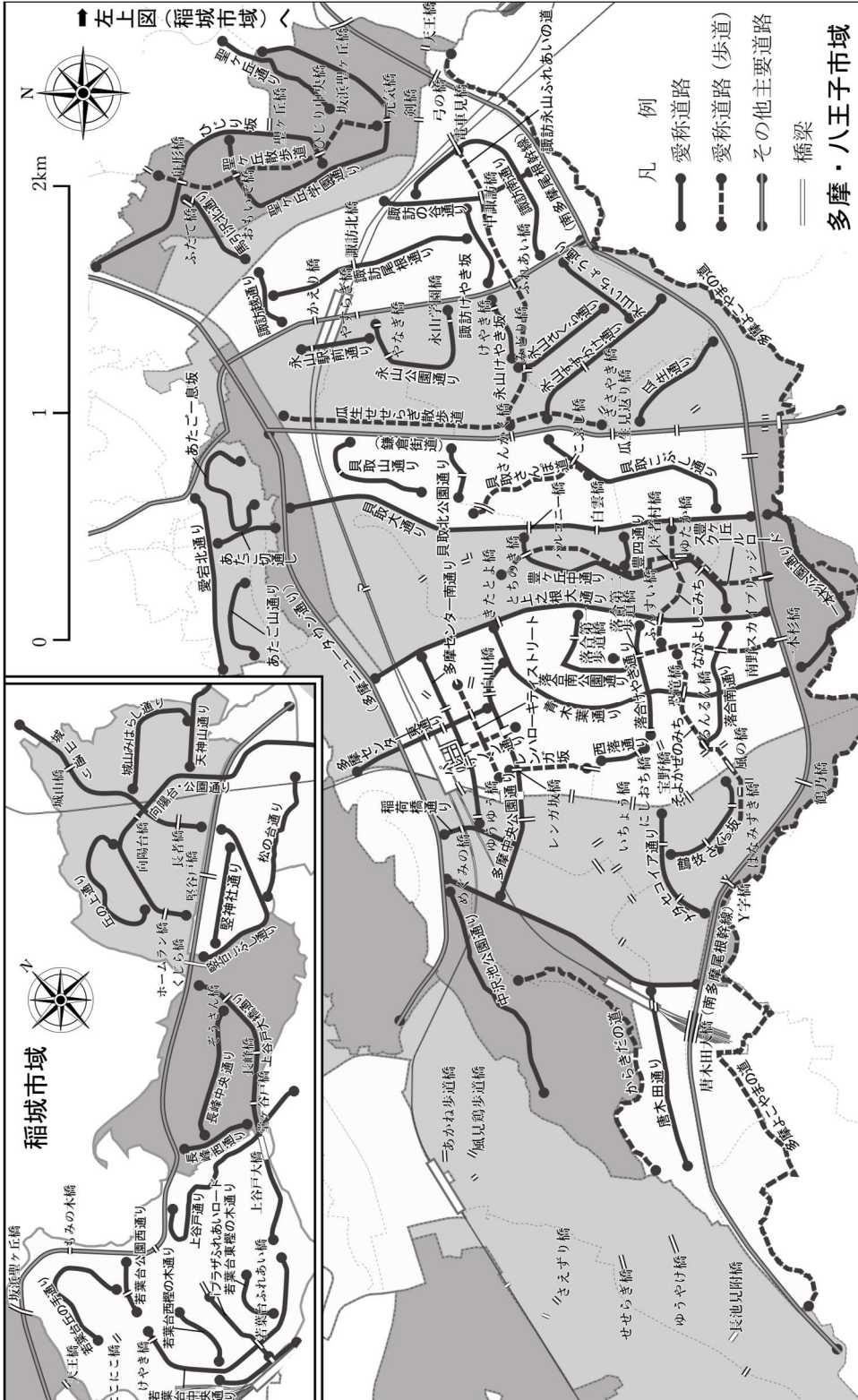
### 3 橋梁名

橋梁名については、開発側の資料として公団による記録が確認できたものの、都や公社の事業区域についての記録は見当たらない。そのため、多摩NT内の橋梁名は各市が管理する橋梁の一覧図（あるいは表）などでその現況を確認できるに留まる。したがって、本節では多摩市域の橋梁を中心に検討を進めたい。多摩市を対象を絞る理由は大きく二つあり、一つは公団の事業区域が大半を占めていることで、その名称の変遷を追いやすいため、もう一つは、多摩市では

多摩ニュータウンにおける地名の命名原理（北西諒介）

表4 開発側資料における道路名の変遷

『あゆみ②』（1987）		『工事記録①』（1990）	『事業誌』（2006）
種別	名称	通称名等	路線名称
幹線道路	幹線1号線の1	鎌倉街道	鎌倉街道線
幹線道路	幹線1号線の2		
幹線道路	幹線1号線の3		
幹線道路	幹線2号線	野猿街道	府中・相模原線
幹線道路	幹線3号線	-	-
幹線道路			
幹線道路	幹線4号線の1	日野町田線	日野・町田線
幹線道路	幹線4号線の2		
幹線道路	-		
幹線道路	幹線5号線の1	唐木田	町田・平山・八王子線
幹線道路	幹線5号線の1	鶴川平山八王子線	
幹線道路	幹線5号線の2	鶴川平山八王子線	
幹線道路	幹線7号線の1	尾根幹線	尾根幹線
幹線道路	幹線7号線の2		
幹線道路	幹線7号線の3		
幹線道路	幹線7号線の4		
幹線道路	幹線7号線の5		
幹線道路	幹線7号線の6		
幹線道路	幹線8号線の1	ニュータウン幹線	ニュータウン幹線
幹線道路	幹線8号線の2		
幹線道路			
幹線道路	幹線9号線	馬引沢（3住区南北縦貫道）	ニュータウン街路1号線
幹線道路	幹線10号線	鶴川街道	東長沼一坂浜線
幹線道路	幹線11号線	-	-
幹線道路	地区幹線1号線の1	永山開発局前	ニュータウン街路2号線
幹線道路	地区幹線1号線の2	貝取／豊ヶ丘間	ニュータウン街路3号線
幹線街路	地区幹線3号線		豊ヶ丘／落合間
幹線街路	地区幹線4号線の1	6谷戸内	ニュータウン街路5号線
幹線街路	地区幹線4号線の2		
幹線街路	地区幹線5号線	唐木田7谷戸内	ニュータウン街路6号線
幹線街路	地区幹線6号線の1	12住区／13住区	ニュータウン街路7号線
幹線街路	地区幹線6号線の2	-	
幹線街路	地区幹線7号線	13住区／14住区間	ニュータウン街路8号線
幹線街路	地区幹線8号線	-	-
幹線街路	地区幹線9号線	-	-
幹線街路	地区幹線10号線	-	-
幹線街路	地区幹線11号線	1住区南北縦貫道	稲城・南多摩線
幹線街路	駅周辺連絡1号線	センター地区	ニュータウン街路13号線
幹線街路	駅周辺連絡3号線	-	-
幹線街路	駅周辺連絡4号線	-	多摩センター西大通り線
幹線街路	駅周辺連絡2号線	センター地区	ニュータウン街路12号線
-	-	1住区内	公園通り線
-	-	2・3住区連絡道	向陽台・若葉台線
-	-	川崎街道	府中・相模原線
特殊街路	歩行者専用道路1号線	-	多摩センター南北線
特殊街路	歩行者専用道路2号線	-	多摩センター東西線
特殊街路	歩行者専用道路3号線	-	多摩センター西線
特殊街路	歩行者専用道路4号線	-	多摩センター4号線
特殊街路	歩行者専用道路5号線	-	多摩センター5号線
特殊街路	歩行者専用道路6号線	-	多摩センター6号線



道路愛称と同様、橋梁名の公募事業も行われたためである。

多摩市による橋梁名の公募は、1992年8月に38橋を対象に行われ、多摩市橋名選考委員会での選考を経て名称が決定された（たま広報1992年8月5日）。しかし、その多くは愛称事業実施以前の1990年の『工事記録①』においても確認されたものであり、事業による実質的な命名がどの程度行われたのか、疑問が残る。愛称事業の対象となった38橋のうち、公団資料に名前がなく、全く新たに名称が付けられたと考えられるのは、「恐竜橋」と「切通し橋」のみである。さらに言えば、これらは公社や都の事業区域に架かる橋梁であるため、本稿で扱う開発側資料に記載はないものの、命名自体は愛称事業の以前から行われていた可能性を残している。なお、図2には『事業誌』に記載の稲城・八王子市域の橋梁名も記載した。

現在、NTの多摩市域内の橋梁は「多摩市橋梁位置図」に確認されるもので、道路橋と歩道橋を合わせて111あるが、そのうち、固有の名前が付けられていると考えられるものは48である<sup>4)</sup>。その基準は定かでないが、前節の道路愛称が付与された歩道に位置する橋には名前が付けられ、対応関係も見出されるなど、実施年度も近い道路愛称事業との関わりは深そうである。

この固有の名前が付いた48の橋梁名は多様性に富んでおり、全体に適用された一つの命名原理を見出すのは難しい。ただし、個別的にその由来などを解釈していけば、橋梁名の命名原理はいくつかの類型に分類することができる（表5）。すでにI章2節で挙げた六つの類型に加え、多摩NTの橋梁名に見出された新たな類型は、二つある。一つは、橋そのものの外観・形状に由来する外観型と言えるもので、「さんかく橋」などが該当する。もう一つは、「かえり橋」など、橋の用途や機能に由来する機能型とする。

橋梁名に見出せる命名原理の諸類型は千里の事例でも確認されたものも含んでいるが、多摩では橋梁という一つの対象に対していくつもの類型が重なり合って存在している。これらの類型と命名主体、あるいはその橋梁の立地分布や規模との間に明確な規則性は見受けられず、橋梁名の命名に体系性を見出すことは困難である。また、固有の名称が名付けられた橋とそうでない橋とを分ける基準も見出し難い<sup>5)</sup>。

#### 4 公園名

公園はその規模や想定される来園圏の広さに応じて階層づけられているが、多摩NTの公園の中には、計画の段階から現在に至るまでの間に管理上の位置付けが移り変わったものもいくつか存在する。また、名称上は別であっても、複数の公園が合わせて一つの公園となっているものも存在する。そのような公園の制度的位置づけの不確定性の一方、開発側の資料で確認できる近隣公園以上の公園の名称自体は、計画から現在に至るまで大きく変わったものはなく、堀之内地区の32号（北公園）と33号（南公園）の命名が最も新しいと見られる（図3）。

その命名原理に着目すると、基本的に総合公園のような来園圏が広く想定された大規模な公園は、多摩や稲城などの市名に「中央」を付する形で命名されている広域名+位置型であること

表5 橋梁名の変遷と由来

橋梁名	由来	命名原理類型
ふれあい橋	“諏訪永山ふれいの道”の路線にあるので	参照
医者村橋	医者村が近くに架かるため	参照
中諏訪橋	中諏訪という地区名が定着しているから	地区名
やなぎ橋	街路樹の“柳”から	樹木・参照
かえり橋	多くの人の帰路としての利用が特徴的	機能
やすらぎ橋	帰り道、緑の多いこの橋を渡るとほっと安らぐので	抽象
熊野橋	-	小字
永山学園橋	小学校と中学校を結び、永山学園通りに架かるため	参照
諏訪北橋	諏訪北という名が定着しているから	地区名
ゆたか橋	豊ヶ丘の豊をとって	地区名変形・抽象
天王橋	-	小字
ふんすい橋	公園の噴水が近くにあるから	参照
けやき橋	街路樹の“けやき”から	樹木・参照
こぶし橋	街路樹の“こぶし”から	樹木・参照
とちのき橋	街路樹の“とちのき”から	樹木・参照
瓜生見返り橋	町田方面への見返りの地点であることから	地区名+機能
白雲橋	街路樹の“白雲木”から	樹木・参照
さんかく橋	子供達にそう呼ばれ、定着しているから(形状)	外観
南野スカイブリッジ	空のイメージがあり、横文字に耐えうるスケールを持つため	外観・抽象
きたとよ橋	豊ヶ丘の北に位置しているため	方角+地区名変形
みどり橋	子供達にそう呼ばれているから(路面の色)	外観
ささやき橋	橋が小さく、また葉がゆれてささやいているようなので	抽象
電車見橋	市内唯一線路に架かる大きな橋で電車がよく見えるから	機能
聖ヶ丘橋	-	地区名
バルコニー橋	バルコニーがあるカタチから	外観
舟形橋	-	外観
おもいで橋	児童、生徒の学校時代の思い出が蘇るように	参照・抽象
ひじり中央橋	聖ヶ丘の中央に位置しているから	地区名変形+位置
元気橋	近くに学校があり、公園に土俵があるから	参照・抽象
ふたて橋	橋がふたてにわかれているところから	外観
ふたて橋	-	外観
剣橋	-	外観
弓の橋	-	外観
いちよう橋	街路樹の“いちよう”から	樹木
風の橋	風のイメージがある(“そよかぜの道”の路線上)	参照・抽象
はなみずき橋	街路樹の“はなみずき”から	樹木
ゆうゆう橋	ゆうゆうとしたイメージを持つので	抽象
レンガ坂橋	“レンガ坂”に通じるため	参照
めぐみの橋	周辺地区の将来の発展を期待して	抽象
宝野橋	昔の字名であり、宝野公園に通じるため	小字・参照
るんるん橋	楽しそうだから(近くに幼稚園小学校等児童利用が多い)	参照・抽象
にしおち橋	西落合中学校専用橋なので	参照
白山橋	白山神社に参道に通じるため	参照
鶴乃橋	-	小字
Y字橋	-	外観
唐木田大橋	-	地区名
一本杉橋	-	小字
恐竜橋	恐竜のモニュメントが特徴的なので	参照
大貝戸橋	-	小字
切通し橋	地域に浸透している名称であり、まためずらしい	参照

資料：『工事記録①』及び「多摩市橋梁位置図」を基に作成

多摩ニュータウンにおける地名の命名原理（北西部分）

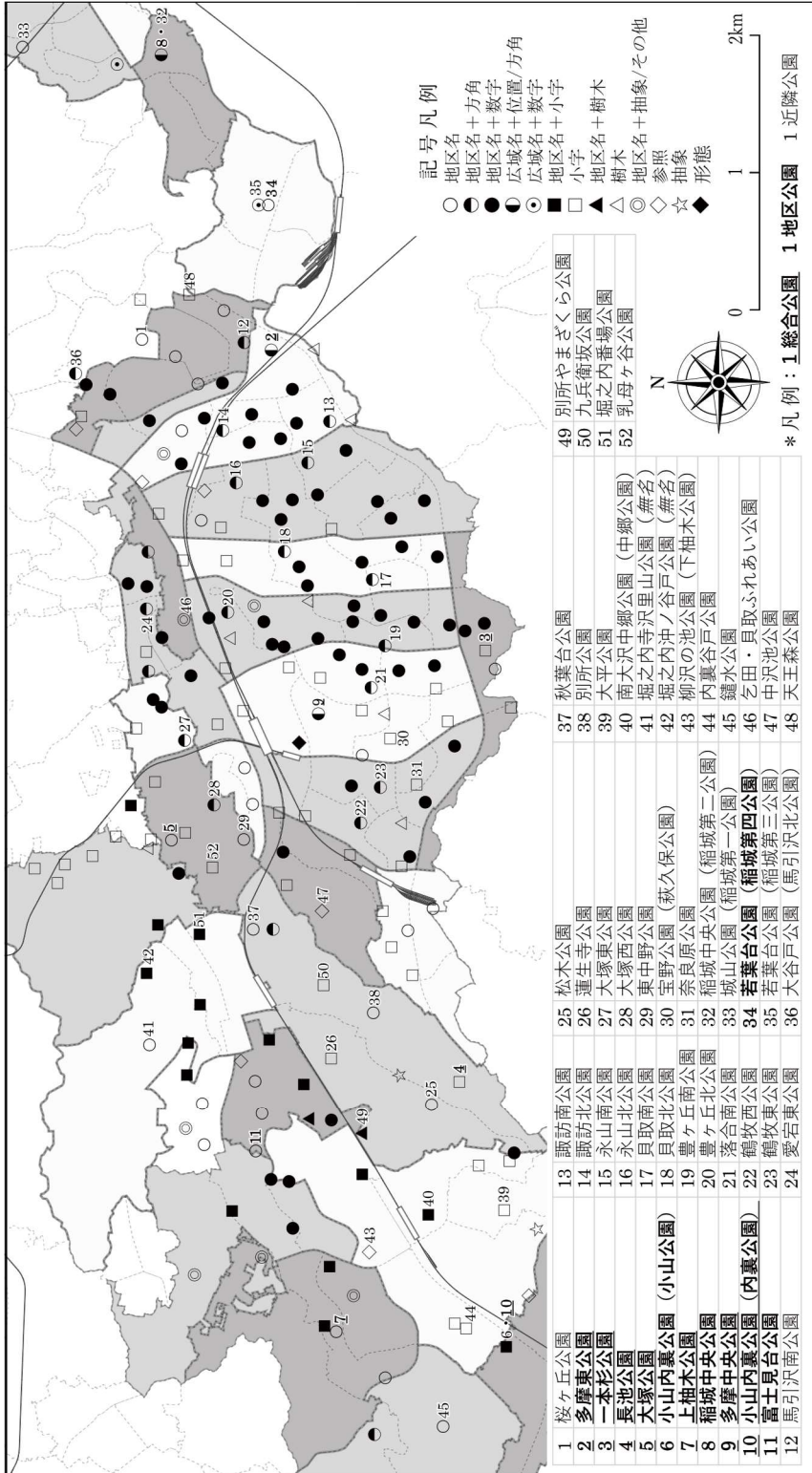


図3 多摩ニュータウンにおける都市計画公園の名称とその命名原理の類型

注1) 表中の ( ) 内は『あゆみ②』における名称を表す。  
 注2) 街区公園（児童公園）、緑地、緑道などの小規模公園の個別名称は省略し、命名原理の類型のみを示した。  
 資料：『事業誌』、「多摩市公園一覧」、「八王子市公園一覧」を基に作成



がわかる。そのほか、近隣公園については、多摩市域の新住地区では、各町（住区）に概ね2園ずつ配されるように計画されており、それと呼応するように、地区名+方角型で名付けられている。一方、稲城市の場合、『あゆみ②』では町ごとではなく稲城市域の3住区で共通の通し番号によって区分される広域名+数字型の名付けが行われ、通称として住地区名型の名称が設定されているが、現状では後者が市による公式の呼称と考えられる。

八王子市域の公園では、公園の規模と公園名との間に明確な規則性は見出せない。例えば、総合公園である「長池公園」と近隣公園である「連生寺公園」はいずれも小字名に由来するものであり、同じく地区名を冠した「上柚木公園」と「下柚木公園」はそれぞれ総合公園、近隣公園となっている。また、八王子市域では多くの近隣公園が従前の小字名を継承している一方、「秋葉台」や「富士見台」など、住区内の住宅街の名称を用いたと思われる例も見られる。

街区公園に着目すると、多摩市では住区名+数字型を中心に、一部で小字型のものも見られる。小字型は落合や鶴牧、中沢といった西部の住区を中心とした後発地域に多く確認された。どちらの地区も公団もしくは市という同一主体による命名と思われるが、名付けにあたっての原則が変容したと予想される。

#### IV 千里NT との比較

ここまで、命名対象の種類ごとにその命名がいかなる原理とプロセスによって行われたかを確認してきた。多摩NTにおいては、完成期の千里で行われたような、全域に対して同時期に地名が生成される大規模な命名行為の形跡は確認されなかった。つまり、多摩NTにおける現状の地名景観は、開発の過程で段階的に名付けられていったところに、市の事業による道路愛称や橋梁名などの新たな命名が重ねられて成り立っていると考えられる。では、こうした地名景観の中からはどのような地名体系が取り出せるだろうか。

千里NTの場合、特に完成期のものに顕著のように、対象物と命名原理・プロセスの間には明確な規則性が見出され、一つの体系を構成していたと考えられたが、多摩NTではそうした規則性は見出しにくく、同じ種類の対象に対し、いくつかの命名原理の類型が混在する状況が指摘された。よって、多摩NTの地名の命名に関しては、全体を一つの体系としてみなすことは難しい。また、それゆえに、付近一帯の命名行為に象徴的な意味づけがあったとも考えにくく、空間識別のための記号として、ある種場当たりに多摩の地名は名付けられていたと考えられる。つまり、少なくとも地名の命名という面においては、多摩NTというスケールでの一体性は重視されていなかったと言えるだろう。

NT 全域スケールでの地名体系は見出されなかったものの、多摩NTの地名景観の中には体系として取り出せるような地名の集合がいくつか存在する。代表的なものは開発側資料に見られる「ニュータウン街路」などの地区幹線と多摩センター周辺の歩行者用道路の成す体系であり、一定の空間的広がりを持った規則的な命名原理の適用が見出せる。また、公園名も同様に、

### 多摩ニュータウンにおける地名の命名原理（北西諒介）

総合公園・地区公園相当には広域名，近隣公園相当には地区名＋方角型，街区公園などには地区名＋数字という階層に応じた秩序が見出せる組が存在する。そのほか，多摩市における道路愛称と橋梁名の間にも一定の対応関係が見られる。よって，これらはそれぞれ同一の命名主体による一つの地名体系として取り出せるだろう。ただし，いずれもその範囲は最大でも多摩市内を中心とした公団施工による新住事業区域など，NTと住区との中間的なスケールに留まる。

また，命名原理，命名プロセスの双方の分析からは，異なる命名対象の間での対応関係が意図された形跡は見られず，ゆえに，多摩NTの地名は各々の対象ごとに小さな体系を成していると言える。さらに，時系列を考慮すると，小字型の街区公園名が多摩市の西部に偏在しているなど，同一主体・同一対象の命名であってもその原理に違いが生まれていることがわかる。つまり，多摩における地名の命名原理の混在，そしてそれによる地名体系の小規模乱立の要因には，開発主体（命名主体）やプロセスの違いだけでなく，開発にかなりの時差が生じたことによる命名傾向の変化の影響が大きいのではないかと考えられる。

一方で，多摩NTで見られた命名原理の類型だけに着眼するならば，前章の分析の中でも所々で触れたように，従前の小字や樹木名など，千里NTでも確認された共通の命名原理が存在することがわかった。こうした共通部分は現代の開発地域における地名命名の普遍的な原理としてみなせる可能性が高い。しかし，当然ながら，こうした類型がどういった対象に対して見出されるか，また，全体としてどの程度の割合で見られるかには地域差がある。

千里NTとの比較からは，多摩NTでは町名や公園名に大字・小字がそのまま踏襲されていることからわかるように，空間識別に使われる語彙が開発の前と後で千里ほど大きな変化を伴っていないことが指摘される。地域全体を新しい街として積極的に意味づけようとする方向づけが存在せず，従前からの地名を一新する必要がなかったことで，多摩NTでは新しい名称が生み出される余地がなかったと考えられる。ゆえに，千里NTで指摘されたような，命名の際に参照点となる事物の乏しさという問題は発生せず，樹木名や抽象名詞，数字などによる命名は，補完的に散在してしか見られなかったものと考えられる。

なお，1980年代中頃の「聖ヶ丘」以降，多摩NT内でもいくつかの町名に新しい地名が創造される例は散見されたものの，これらを多摩NT全体を新しい地域として位置づけようとする動きとしてみなすことは難しいだろう。なぜなら，同時期の開発でも八王子市と稲城市の間での町名の命名傾向には明確な違いがあることから明らかなように，多摩NTの町名は各市における町名行政のあり方や，同じ町内になる人々の交渉という個別的要素による影響が大きいと考えられるためである。

以上に見たように，多摩NTの地名景観の内実は，各々に異なった原理・規則を持ったいくつもの小規模な地名体系に分節されるといえる。それは開発主体・開発時期・命名対象のうちのいずれかが違えば，その都度新たな原理・規則が採用されるという，ある種場当たりのなものとして見出せる。その主な要因は，NTの開発主体・開発方式やその時期が異なっていたこと，ま

た、それゆえに命名主体をはじめとした命名プロセスに差異が生じたことに起因すると思われる。千里のように NT の事業完了を契機とした全域を対象にした命名（改名）行為が行われなかったこともあり、地名の命名原理は多種多様なものになったと言える。

## V おわりに

本稿では、多摩 NT の地名の命名原理と命名プロセスの検討と千里 NT の事例との比較を通して、開発地域の命名の特徴と、地域一帯に対し行われる命名行為の持つ意味について考察した。その結果、千里と同様、樹木名や抽象名詞などを基にした命名原理の諸類型が確認された。これらは開発地域あるいは近現代における地名の命名原理の一般的な傾向として位置づけられる可能性が高い。しかし、その分布状態は大きく異なり、特に多摩では大字・小字を中心とした従前からの地名の継承が多く見られた。ゆえに、北西（2018）が千里 NT で指摘したような、参照点となる事物の乏しさによる造語的な命名原理を用いる必要性は低かったと考えられ、多摩 NT の空間分割は大字・小字名などを基本とした語彙によって多くが果たされ、補助的にそれ以外の類型が用いられたと考えられる。加えて、多摩 NT 一帯への命名行為が持つ意義については、開発時期や開発主体による差異により、規則性のある命名原理の適用基準としての地名体系を見出すことはできず、命名対象の種別を越えたまとまりもあまり見られなかった。

なお、本稿では触れることができなかったが、命名原理を探求したものに今里（2012）による筆名の研究がある。今後は今里の指摘した認知言語学による命名原理と、前稿および本稿の事例との関わりも示していくことで、より普遍的な地名の命名原理の解明の方向性を模索したい。加えて、拙稿の千里 NT の事例では行った、命名後の使用・定着状況の検討についても、今回は触れることができなかった。こちらも今後の課題としたい。

（京都大学大学院人間・環境学研究科 院生）

【謝辞】本稿の作成にあたっては、多摩市役所・稲城市役所の職員の方々には大変お世話になりました。御礼申し上げます。

### 【注】

- 1) この白地区は恐らく現在は聖ヶ丘の町内に入っているものと思われる。
- 2) 若葉台駅の由来については、「周辺は緑の多い丘陵地帯であることから」（京王電鉄株式会社広報部編 1998: 280）とされる。
- 3) NT 内の道路体系には「NT 街路」のほか、多摩センター駅前地区を中心とする「駅周辺連絡」という区分も存在する。
- 4) 区画整理事業区域を中心に分布する河川・水路に架かる橋梁については対象としていない。また、開発側資料において、公団施工の橋梁の多くは「311 橋」や「多2・1・6 歩道橋」など、その橋が跨ぐ道路の番号が付されたと思われるものであった。このような名称が当初の名称であり、どこかの段階で一部の橋梁に対し固有の名称が付けられていったものと見られる。

## 多摩ニュータウンにおける地名の命名原理（北西諒介）

- 5) こうした橋梁名の規則性を解釈するための可能性として、多摩 NT における橋の設計思想の変遷について触れておきたい。『多摩 NT 橋梁景観事例集』（都市基盤整備公団東京支社多摩 NT 事業本部 2001）によると、多摩 NT の橋の設計思想は工期によって変遷してきたという。これは橋梁の社会的位置づけの変容とも捉えられ、各橋梁の命名原理と開発順序との関わりを窺える可能性はある。

### 【参考文献】

- 今里悟之 2012. 長崎県平戸島における筆名の命名原理と空間単位—認知言語学との接点—. 地理学評論 85(2), 106-126.
- 大阪府 1970. 『千里ニュータウンの建設』大阪府.
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1978. 『角川日本地名大辞典 13 東京都』角川書店.
- 北西諒介 2018. 千里ニュータウンにおける地名の命名とその影響. 地域と環境 15, 83-102.
- 京王電鉄株式会社広報部編 1998. 『京王電鉄五十年史』京王電鉄株式会社.
- 佐藤健正・市浦ハウジング&プランニング編 2016. 『市浦ハウジング&プランニング叢書 日本のニュータウン開発と(株)市浦ハウジング&プランニングの取り組み』市浦ハウジング&プランニング.
- 住宅・都市整備公団南多摩開発局 1990. 『多摩ニュータウン工事記録』住宅・都市整備公団南多摩開発局.
- 東京都多摩市都市建設部都市計画課編 1992. 『多摩市の町名』多摩市.
- 東京都南多摩新都市開発本部 1987. 『多摩ニュータウン開発の歩み』東京都南多摩新都市開発本部.
- 独立行政法人都市再生機構東日本支社多摩事業本部 2006. 『多摩ニュータウン事業誌 通史編』独立行政法人都市再生機構東日本支社多摩事業本部.
- 都市基盤整備公団東京支社多摩ニュータウン事業本部 1999. 『多摩ニュータウン工事記録 1991～1999』都市基盤整備公団東京支社多摩ニュータウン事業本部.
- 都市基盤整備公団東京支社多摩ニュータウン事業本部 2001. 『多摩ニュータウン橋梁景観事例集』都市基盤整備公団東京支社多摩ニュータウン事業本部.
- 波多野憲男・佐藤雅義 1983. 多摩ニュータウン新住宅市街地開発事業における居住地環境整備に関する調査. 総合都市研究 19, 3-43.
- 山口恵一郎 1977. 『地名を考える』日本放送出版協会.
- Azaryahu, M. 1986. Street names and political identity: The case of East Berlin. *Journal of Contemporary History* 21, 581-604.
- Liudmila, S. Zamorshchikova, Irena, S. Khokholova, Anna, N. Ikonnikova, Marianna, V. Samsonova and Viktoria, V. Lebedeva. 2018. Toponymic Landscape of Central Yakutia: Etymological Analysis of Geographical Names. *Journal of Siberian Federal University. Humanities & Social Sciences*, 359-370.
- Zelinsky, W. 1993. Parsing Greater Washington's Namescape. *Names* 41(4), 344-360.